

K-806

大塚天神古墳

— 第 I 次調査概要 —



1997

山形県山辺町教育委員会

例言・凡例

- 本書は、山形県山辺町大塚地内に所在する大塚天神古墳第1次調査の概要である。
 - 本書成にあたっては、努めて平易な記載内容であるように留意し、速報的にまとめたものである。従つて、正式な報告は後刊の報告書に記載し、見解の変更がある場合は後刊を是とする。
 - 調査は、山辺町教育委員会が主体となり、平成8年8月26日から10月12日までの期間で実施した。
 - 第1次調査の体制は下記の通りである。
- 調査総括 蜂谷四郎(山辺町教育長)
調査担当 萩木光裕(日本考古学协会会员)
調査員 工藤一夫(現場主任)・後藤禮三(ふるさと資料館館長)・佐藤雄雄(町史編纂専門員)
・高橋玄寿(相模地区郷土文化を訪ねる会)・鈴木利明(町文化財調査委員)・村山賢司(町郷土史研究会)・三浦浩人(町郷土史研究会)

- 作業員 伊藤重雄・伊藤豊・多田惣一郎・峰田要・渡辺末吉・渡辺英子・会田カネヨ・小関美乃子・遠藤節子・佐藤愛子・三浦千代
事務局 長岡順吾(教育次長)・渡辺直好(社会教育係長)・峰田順一(社会教育係)・安孫子正治(社会教育係)・青木稔(相模公民館主事)・武田忍(大寺公民館主事)・垂石敏子(近江公民館主事)

▲1 B区の完掘状況



▲3 1次調査区の調査前状況



▲4 試掘調査で出土した埴輪の一部

調査協力 小関将(地区総代)・高橋正弘(町産業課長)・東海林昌徳(町産業課農業係長)・武田真也(佛武組)

- 発掘調査及び本著作成にあたっては、次の先生方、諸機関より御指導・協力をいただいた。
加藤 徹(東北芸術工科大学教授)
川崎利夫(県立うきうたむ風土記の丘資料館館長)
阿古島功(山形大学教授)
片桐繁雄(最上義光歴史館事務局長)
手原 孝(米沢市教育委員会)
吉野一郎(南陽市教育委員会)
渡邊泰伸(仙台育英高校教諭)
結城慎一(仙台市教育委員会)
藤沢 敦(東北大隈埋蔵文化財調査室助手)
地元大塚地区 山形県教育委員会
- 出土埴輪については、明治大学の大塚初重先生、小林三郎先生から実見して頂き御指導を頂いた。
- 出土埴輪は現在整理中である。遺物の強化処理については、武田昭子(昭和女子大学専任講師)の御指導を頂いた。
- 本書執筆の基準は下記の通りである。
(1) 本書挿図中の方位は磁北を示している。
(2) 仮の主軸を想定し、グリッドを設定したが、その南北軸はN 2° 20' -Eを測る。
(3) 調査区平面図、土層断面図は1/20縮尺で採録し、各拡図にスケールを付した。
(4) 土層の色調については、1987年版農水省農林水産技術会議事務局監修「新版標準土色帳」に掲載した。
- 9 本書の作成・執筆・編集は、萩木光裕が担当した。

▲2 大塚天満神社と現在の噴丘全景

I 古墳の立地と環境

大塚天神古墳は、山辺町の南部にある大塚地内で新たに発見された古墳です。最上川の中流部に位置する山形盆地の西側は、標高996mの白鷹山を中心として、比較的なだらかな白鷹丘陵が連なっています。山辺町は須川を境として、その西側に位置し、白鷹丘陵の山麓部から須川に向かって緩く傾斜する平野部には、一面の疊かな田園と果樹園が広がっています。

緑あふれるなどだらかな白鷹丘陵は、平野部に近い里山として、多くの恵みをもたらし、古くから人々の生活と密接に係わってきました。この地域には、丘陵から流れ出る中小の河川や、穏やかな気候風土に育まれ、古代から生活や農耕の適地として多くの遺跡が残されています。

山辺町の南の郊外に位置する大塚地区は、標高110mほどの周囲よりわずかに高い平野部の台地に広がる集落です。その東側一帯の須川までの地域は、現在、宅地として開発され、多くの人々が住っていますが、以前は、深い凹地状の低地になっていました。古い地図を見ると、昔の旧河道の跡が残っており、須川が大きく蛇行して、この付近を流れていることを物語っています。また、一旦、洪水になると、この低地一帯に水が押し寄せる氾濫原であったと考えられます。

大塚の集落は、この氾濫原を望む段丘上に立地しており、古墳は、西から張り出した段丘先端の見晴らしの良

い小高い丘に築かれています。その当時は、須川の流れや周囲に点在する村や水田を一望できる景勝の地であったでしょう。

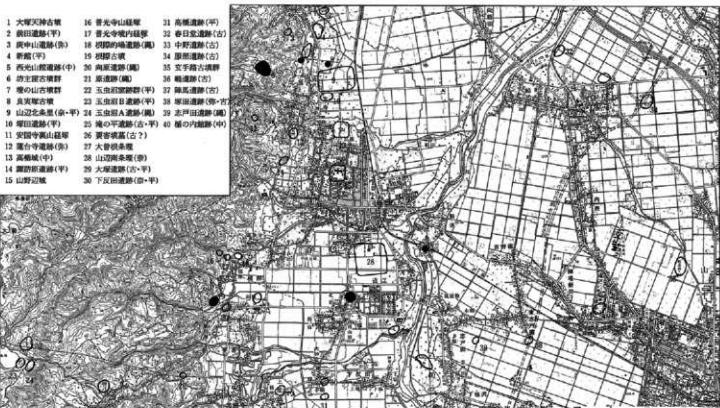
現在、古墳の上にある天満神社は、いつごろ祀られたのかははっきりしませんが、一旦大雨が降ると、すぐ洪水になり土地が削られてしまうため、大きな堤防を築き、その上に天神様を祀って祈願したとも伝えられています。そのため、「川どめ天神」あるいは「川よけ天神」とも呼ばれていました。古墳が立地する周辺の地形状況は、その様子を雄弁に物語っていると言えます。

大塚天神古墳の東約500mの須川の岸に近い後明沢川の段丘上には、古墳時代前期の大塚遺跡があります。大塚遺跡からは、複合縄文・胴部球形の大型壙、高壠、小形丸丘壙などが出土し、遺物の特徴から4世紀後半から5世紀初頭の集落跡と考えられます。

弥生時代や古墳時代前半期の集落は、丘陵から流れ出る河川に沿った段丘や自然堤防などの周囲よりわずかに高い高台に集中して営まれ、その周りに広がる低湿地で稻作を行っていたようです。その村々を見渡す山麓部の丘陵には山形市の谷柏古墳群や菅沢古墳群、山辺町根際古墳、坊主塚古墳など多くの古墳が帶状に連なっています。

このように、今回の大塚天神古墳の発見は、日当たりが良く、水の便にも恵まれ、古墳時代から農耕の適地として、埴輪を樹立した古墳を造り得るだけの社会とそれを掌握した首長が存在したことを示しています。

▼5 大塚天神古墳と周辺の遺跡



II 調査の経緯と経過

大塚天神古墳は、東側に国道458号線が通る高台にあります。道路に接した西側に、大きな杉が繁る坂があり、天神様が祀られています。南側には神社へ至る立派な参道や鳥居があり、大塚の天満神社として近郷の人々の信仰を集めきました。

現在、天神様がある坂は、麓で東西約33m、南北約31mの大きさで、北東部に張り出した畳んだ円形をしています。頂上部は、神社を造る時に削られて平原になされたようで、東西約23m、南北約20mの平坦面となっています。高さは、西側の麓から、約2.2m、東の水田面から約3.4m程度です。今回調査した西側の地域は、最近、残土を捨てて盛土し、一段高くなっていますが、以前は参道西側の水田と同じ高さであったそうです。

この天神様が祀られている坂については、以前から、古墳ではないかと言われていましたが、確認が得られないまま現在に至っていました。山辺町では、農村総合整備モデル事業の一環として、この坂に隣接する西側一帯の町有地に、農村公園を造成することになりました。山辺町教育委員会では、先人の残した地域の貴重な文化財を保護するために、工事に先立ち平成8年3月11日に、

試掘調査を行いました。その結果、現在の墳丘から約10mほど離れた地点に、地山の落ち込みがあり、その付近から多量の埴輪片が出土しました。

その調査によって、天神様のある坂は、比較的規模の大きい埴輪を伴う古墳であり、重要な遺跡であることがわかりました。山辺町教育委員会では、山形県内で確實に埴輪を伴う古墳は極めて少なく、今回の発見が3例目であり、日本海側の北限に位置すること、古墳の規模が比較的大きく、地域の古墳時代を考える上でも、特に重要な意味を持つものであるとの認識で、関係諸機関と協議を重ね、工事に先立って、古墳の規模や範囲、埋まっている深さなどを確認するための調査を実施することにしました。

調査は、平成8年8月26日から10月12日まで行い、9月27日に調査の成果を説明するための、現地説明会を開催しました。最初に、現況の墳丘を記録するため、20cm間隔の等高線を入れた図面を作りました。試掘調査の段階で、現在の墳丘からかなり離れた地点から遺物が出土しているため、前方部のような張り出しが参道側にある可能性も考えられたので、墳丘の中央と参道を結ぶ仮の主軸を想定し、それを基準として2m四方のマス目を全体に設け、それぞれの位置関係が判るようにしました。

今回の調査は、工事予定地の町有地を対象としたものなので、南からA区(試掘トレンチを含む部分)～D区の4つの調査区を全体に設け掘り下げました。その結果、各調査区で、元々の古墳の裾に当たる部分(埴輪線)が弧を描くように検出され、付近からたくさんの埴輪が出土しました。調査は、かなり深く掘ったため、大変苦労しましたが、ほぼ予定通り終了することができました。

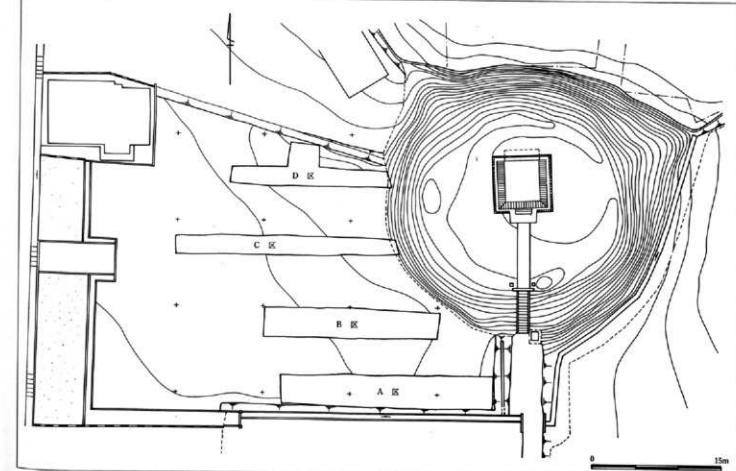
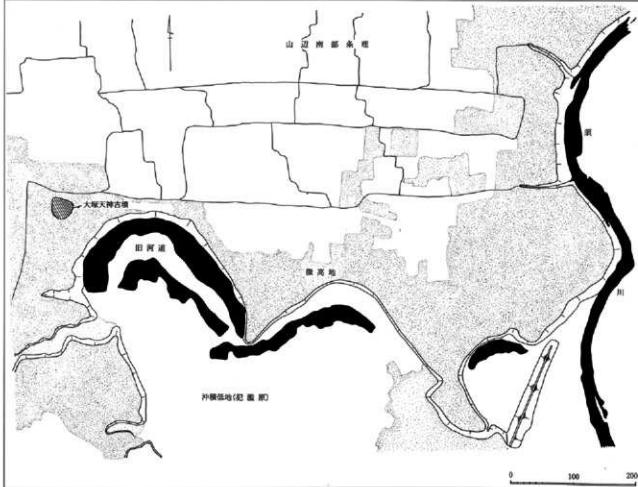
▼8 B区の調査状況



▼9 現地説明会の開催状況



▼6 古墳周辺の地形区分



▲7 古墳の現況と今次の調査区(等高線間隔20cm)

III 各調査区の概要

(1) A 区

A区は、調査区の南側で、参道に接して3月に試掘した部分を含むように設定した調査区です。調査は、最初に最近盛り土された部分を取り除き、試掘トレンチを再び掘り上げて土層の断面を確認しました。それによると、参道に接した調査区の東側部から、10mのところに、試掘トレンチの両壁面に地山の落ち込みがあり、埴輪もこの付近から集中して出土したことがわかりました。

以上の検討結果を参考にして、調査区内の掘り下げを行い、地山の落ち込み線の状況を追及していました。それによると、A区の南東部から北側の壁面中央部に連なる弧状の段差が検出されました。その落ち込みの深さは、確認面から約30cmほどで緩やかに傾斜しています。

この段差を境にして、その落ち込んで低くなった部分には、黒褐色の焼けた土と多く含む粘土質の土層が堆積しています。土層の断面をみると、現在の表土は最近、盛り土してカサ上げされた土層(1層)で、70cmから80cmの厚さがあります。その下がかつての田面になります。(2層上面)3層は、その水田の耕作に係わる土層です。また、4層以下の土層には、小さな地山の粒子を均一に含む土層です。

色々と検討した結果、弧状に連なる地山の落ち込みは、本来の古墳の裾(埴籠線)に当たる部分であると考えられます。その外側(西側)の一級低くなつた部分は、古墳の周囲を取り囲む(周溝)で、黒褐色の粘土質の土層は、そ

の周溝に堆積した土層と思われます。

周溝の幅については、A区内では、外側のはっきりした立上りは確認できませんでした。

古墳は、土を盛り上げて造った一種の土木構造物と言えます。古墳を造る際には、一度に大量の土砂を一気に盛り上げるのではなく、少しづつ突き固めながら形を整えていきます。従って、その土層の断面は薄い層状を呈しています。A区で検出された埴籠線の東側(埴丘側)には、そのような盛り土された土層は、観察されませんでした。

4層以下の土層は、埴丘側の埴籠の落ち込みを確認した面から、周溝覆土の上面まで堆積しています。このことは、いつかは判りませんが、ある時期に、本来あった古墳の埴丘が削り取られてしまったことを示していると考えられます。

埴輪は、A区のほぼ全域から出土していますが、特に、埴籠線の上場から周溝の落ち込み付近にかけて帶状に集中して検出されました。その出土状況は、小破片が周溝の際に雛然と折り重なったような様子を呈しています。

埴輪の出土する土層の位置をみると、周溝底面に張り付いて出土するものは少なく、大部分は周溝覆土の上層に包含されています。これらの埴輪は、本来、埴丘の上に立て並べられていたものが、長い年月の間に、倒壊し、転げ落ちて、埴籠部から周溝の立上り付近に堆積したようです。従って、A区から出土した埴輪は、本来の位置に設置されていたものではありません。出土した埴輪は、円筒埴輪がほとんどで、一部、朝顔形円筒の破片も混じっていますが、底部はあまり認められません。

▼10 墓輪群の出土状況



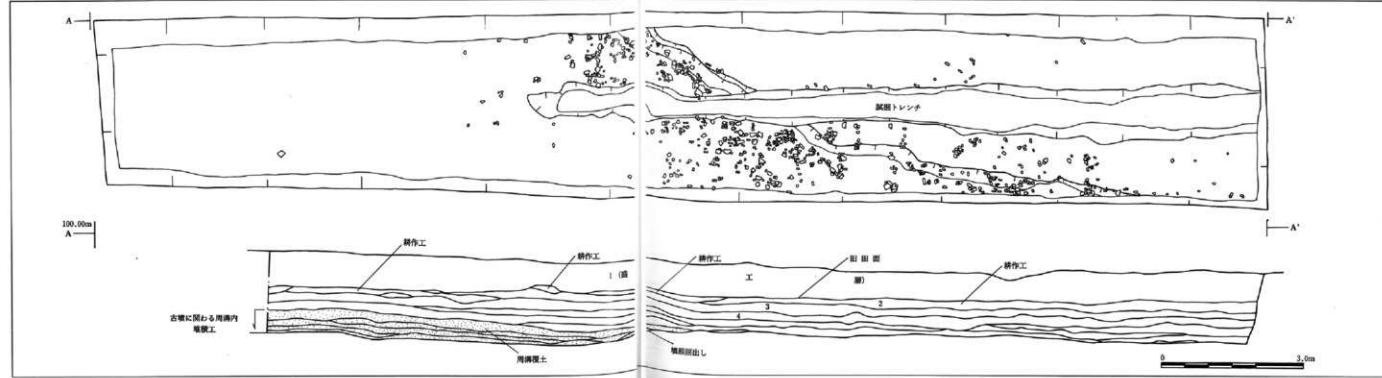
▲11 A区の全景



▼12 A区で検出された埴輪と埴輪



▼13 A区の平面図と土層断面図



(2) B 区

B区は、A区の北に隣接して、現在の墳丘裾から西側に設けた幅4.0m(グリッド杭を残すためベルトを設けたので、実際の発掘幅は3.5m)、長さ20mの調査区です。

掘り下げを進めていくと、調査区中央部よりやや西側の地点から、A区で検出された段差と同じような地山の落ち込みが検出されました。落ち込みの深さは、その確認面から35cmほどあります。斜めに地山が削り出され、やや済曲しながら弧状に連なっています。ここが、本来あった古墳の墳壠にあたる部分と考えられます。

土層の断面をみると、墳壠の削り出された斜面にそって、墳丘からの流れ込みと思われる灰褐色を呈する砂質の土層があります。その外側(西側)には、黒褐色の炭化物を多く含む粘質な土層が、薄い層状になって2~4層に分かれて堆積しています。この土層は、古墳の周りを取り囲む溝溝に堆積した土層で、直接、古墳と係わりを持つ土層と言えます。

A区と同様に、最上層に厚さ約60cmの盛土層があり、その直下が元の田面になります。旧耕作土の下には、小さな地山の粒子を含む土層が、墳丘側から周溝内に堆積した土層の上に連続して認められます。その状況は、A区と同様で、墳丘は以前に削平されたものと考えられ、積み土は確認できませんでした。墳壠の落ち込みは、旧耕作土の下にある削平された堆積土を取り除くと、初めてその落ち込み線が検出される状況になります。

また、B区でも、周溝の外側(西側)の明瞭な立上りは確認することが出来ませんでした。

さらに、調査区内の墳丘側中央部に、南北方向に走る溝のような造構が掘り込まれているのが見つかりました。その幅は、2.7m程度で、溝の中には黒色の粘質土が堆積しています。全部を掘り上げていないので、はっきりしたことは判りませんが、調査区の壁際にサブトレンチを設け、断面で確認しました。それによれば、溝の深さは、約30cm程度です。

埴輪は、A区と同じような状況で出土しました。墳壠の削り出された斜面にそういう状態や周溝の落ち込み付近に、転げ落ちたような状態で出土しています。調査区の西端部からは、埴輪はまったく出土しませんでした。また、墳壠斜面や周溝底面に張り付いているものは少なく、浮いた状態で出土していることから、墳丘から転げ落ちて堆積したものと考えられます。なお、墳壠部に埴輪が据えられたような形跡は認められませんでした。



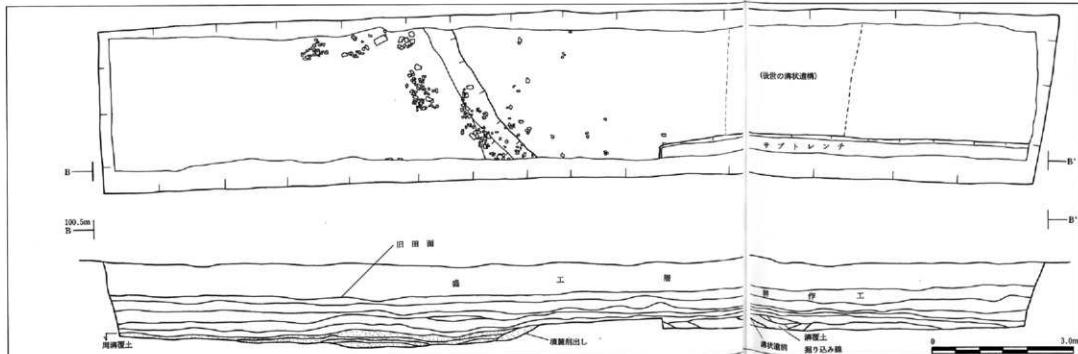
▼14 B区の全景



▲15 B区検出の墳壠と埴輪の出土状況

◀31 古墳周辺の景観
(中央の山辺ファミリータウンの西カーブ)
した道路の右手の森が古墳

▼16 B区の平面図と土層断面図



▲17 墓丘削平後に掘られた溝跡

(3) C 区

C区は、現在残っている墳丘の裾部から西側にかけて設定した調査区で、 $2 \times 26m$ の大きさです。この調査区では、周溝の外側の立上りを確認する目的で、可能な限り西側に延長しました。

その結果、調査区の東端より10mの地点から、墳籠と考えられる落ち込みが検出されました。この地点は、現況の墳丘裾から西側に約10mの距離があります。また、

調査区の壁際に、サブレンチを設けて深掘りし、墳丘の積み土の状況を確認しました。

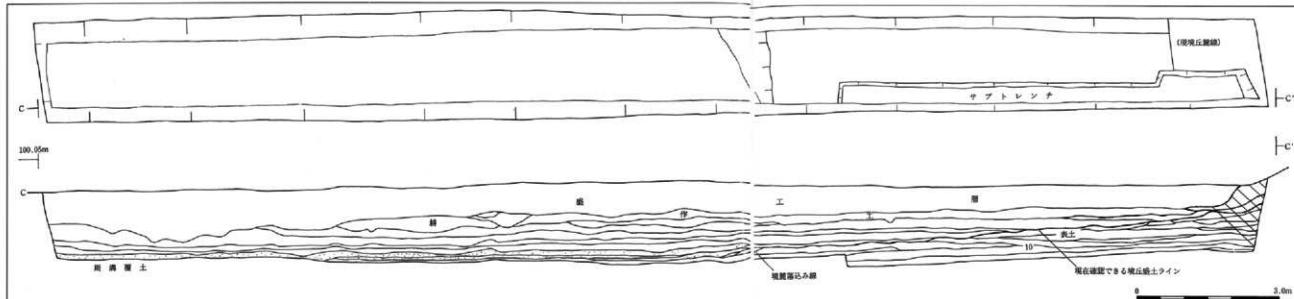
土層の断面をみると、現在確認できる墳籠の落ち込み深さは、35cmです。落ち込む斜面にそって、流れ込みと思われる砂質の土層があり、その外側には周溝に堆積した黒褐色の擾土層があります。しかし、C区でも明瞭な周溝外側の立上りは検出されませんでした。

最上層に盛土層があり、その下に盛り土される以前の旧田面と耕作土があります。その耕作土の下には、やは

り墳丘を削り取ってならされたと思われる土層が認められます。しかし、C区では、現況の墳丘に一部食い込んで、サブレンチを設けたので、削り取られないで残った墳丘の積み土の一部を確認することができました。それによれば、墳籠部は、地山を削り出して墳形を整え、墳丘は古墳が造られる以前の旧表土の上に盛り土をしていると考えられます。旧表土の上には、薄い層状の人為的な版築土が堆積しています。

19 C区で検出された墳籠線

▶



▲18 C区平面図と土層断面図

▼21 D区墳籠で出土した埴輪群



(4) D 区

D区は、今回の調査で設けた調査区で、最も北側に位置する調査区です。設定した調査区の大きさは、 $18.6 \times 2.0m$ で、墳籠の部分を北側に2.8m程拡張しました。

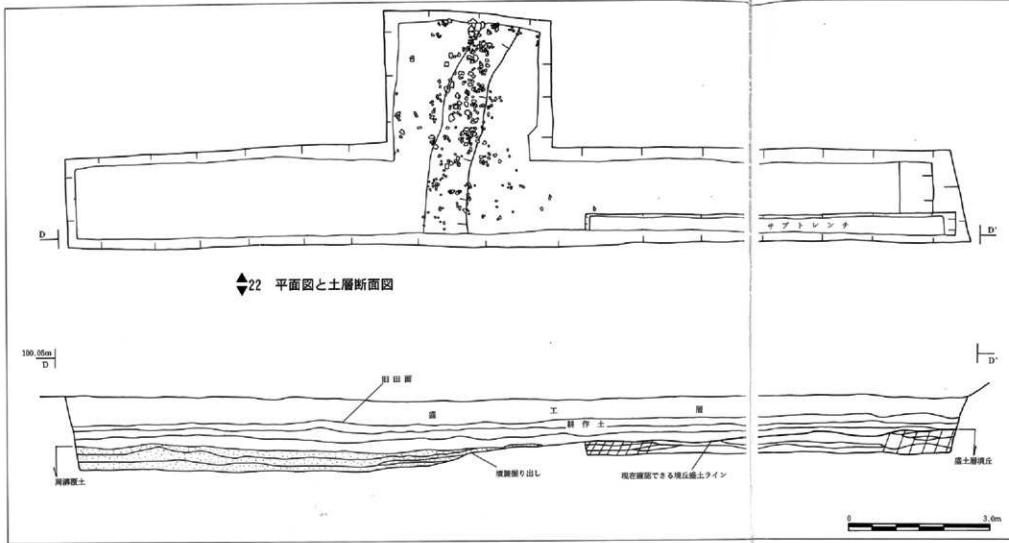
その結果、ほかの調査区と同様に、ゆるく弧を描く落ち込みが検出され、この部分が本来の墳籠にあたる部分と考えられます。墳籠は、地山を削り出したながらかな斜面となっており、その斜面に沿って、黒褐色の炭化物を多く含む泥炭質の土層が堆積しています。墳籠の外側(北側)の一段深くなった部分には、3層程の周溝擾土が認められます。周溝の底面までの墳籠の落ち込み深さは、約35cm程度です。

土層は、ほかの3調査区と同様な状況を呈しています。現在の表土である盛土層は、厚さが約50cm程あり、西へ

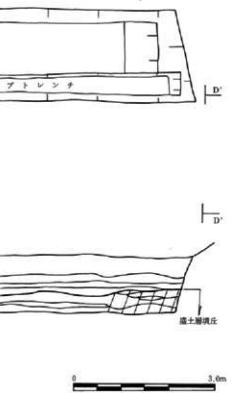
いく程厚くなっています。その下に、旧田面と元の耕作土があります。耕作土の下には、削平されて堆積したと考えられる土層が認められます。

また、D区では、現在の墳丘の裾に当る部分から調査区を設けましたので、C区と同じように、元々の削り取られないで残った墳丘の積み土の一部を確認することができました。それによれば、墳丘部は旧表土の上に土を薄い層状に盛り上げて築成していることがわかります。

埴輪は、墳籠の斜面に沿って多量に出土しました。墳籠から離れた周溝部分からは、埴輪はほとんど出土しません。また、墳籠落ち込みの上部に接した部分にも埴輪の破片が認めますが、埴輪が据えられたような形跡は確認できませんでした。



▲22 平面図と土層断面図



▼23 A区 朝顔形埴輪の出土状況



▲24 D区 墓體部出土の埴輪群



▼25 B区 円筒埴輪の出土状況



▼26 B区 円筒埴輪（底部）の出土状況

IV 出土遺物

今回の調査では、各調査区から多量の埴輪片が出土しました。総数は、3月に実施した試掘調査の時に出土したもの加えると約1200点程度になります。

その出土状況は、これまで述べたように、いずれも埴籠の落ち込みと周溝のきわに沿った部分に集中します。埴籠から離れた部分からはほとんど埴輪の出土は認められません。また、埴輪片に混じって、数点の土師器の破片も出土しています。土師器は、壊の破片と思われますが、いずれも小さな破片で時期を特定することはできませんでした。

今回の調査で出土した埴輪は、大部分が円筒形と朝顔形円筒の破片ですが、一部、板状の被片表面に三角形の線刻のあるものや傘状を呈するものなどもあります。これらの檐や衣笠などの器財を模った破片である可能性があります。なお、人物を模ったと思われる埴輪は認められませんでした。

円筒埴輪は、いずれも破片でその全体を確認できるものはないので、ほかの資料を参考に推定すると、底径は約30cm程度で、口縁部が広がる形態を呈するようです。口径は約40cm程度です。突帯の間隔は約20cm位と考えられ、3条の突帯があり、上部に円形の透孔があけられています。全体の高さは60~70cm位と考えられます。突帯は台形やM字形を呈し、しっかりとされています。

朝顔形円筒埴輪では、口径約50cm位でかなり大形のものとを考えますが、全体の状況を確認できる例はありませんが、口縁部中央に突帯を持ち、二段に広がる形態を呈します。

調整は、一次調整として、外面紙ハケ、内面、斜めハケ、口縁部横ナデを基本とし、二次調整は省略されているものが大部分で、一部、横ハケを持つものもあります。

V 調査のまとめと課題

大塚天神古墳は、平成8年3月に実施した試掘調査によって、新規に発見された古墳です。現況の墳丘に接する西側一帯の町有地で、農村公園を造成する計画があり、それに伴って実施したものです。調査に際しては、A～D区の4本のトレチを設定しました。その調査によって、今までに知り得たことについてまとめておきたいと思います。

(1) 形態と規模

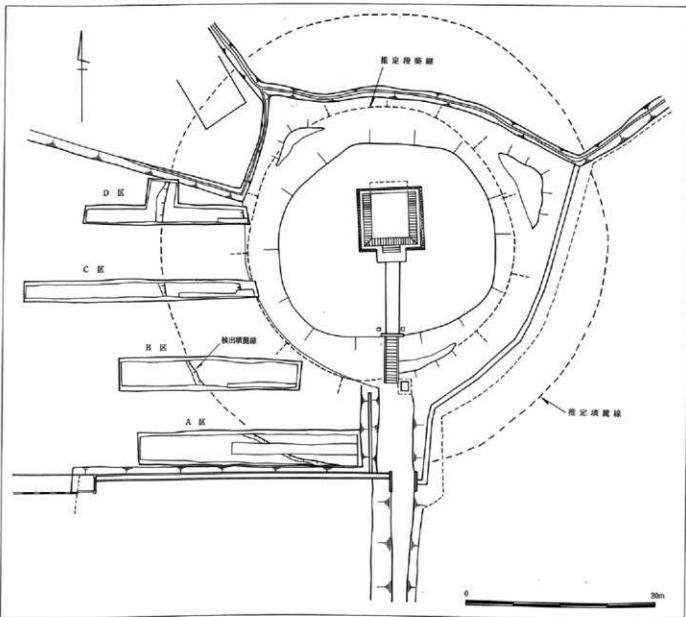
今回の調査で設けたA区～D区と呼んだ4本のトレチのいずれからも、地山を削り出した落ち込みが検出されました。その落ち込みは、どの調査区でも現況の墳丘部から10m西側に離れた地点で確認されました。落ち込みの外側で一段低くなった部分には、泥炭質の土層が堆積しており、古墳の周囲を取り囲む周溝であると考えら

れます。しかし、今回の調査では外側の周溝幅を確定する明瞭な立上りは検出できませんでした。C区のさらに西側にあるとすると、検出墳籠から15m以上の周溝幅があることになり、少し広い感じがしないでもありません。あるいは、古墳は、西から東へ向かって傾斜する台地の先端部に築造されており、東より高い西側一帯は、広範囲に土が削り取られて墳丘の積み土にされている可能性もあり、明瞭な堀り込みは無いのかもしれません。さて、4本のトレチから検出された落ち込みは、本来あつた墳丘の墳籠線と考えられ、弧状に整然と連なっております。それを結ぶと直径49～50mの円になります。調査では、特に張り出しは認められず、現段階では径50m規模の円墳と考えられます。さらに、現在残っている墳丘斜面にテラス状の平坦部が残っている箇所があり、本来は二段築成であったと思われます。

(2) 墳丘の築成法と埴輪の設置状況

今回の調査では、墳丘の下段部分は以前に削り取られ

▼27 古墳の推定全体図



てしまったようですが、C、D区から積み土の一部が確認されました。それによると、墳籠部は地山を削り出して整形し、墳丘は、旧表土の上に薄い層状に土を積み上げています。旧表土のレベルは、旧田面の下約60cm位のところで、墳頂部まで相当量の盛土をしていることになります。

埴輪は、その出土状況や包含されている土層の検討などから、元位置にあったものではなく、墳籠にも据え置かれた形跡は認められません。また、墳籠落ち込みの上場にも埴輪があることから、直接、墳籠から墳丘が立ち上がるのではなく、周囲に一定幅の平場が巡っていた可能性もあり、埴輪の配置状況の確認とともに、今後検討しなければなりません。

(3) 墓輪の特徴と時期

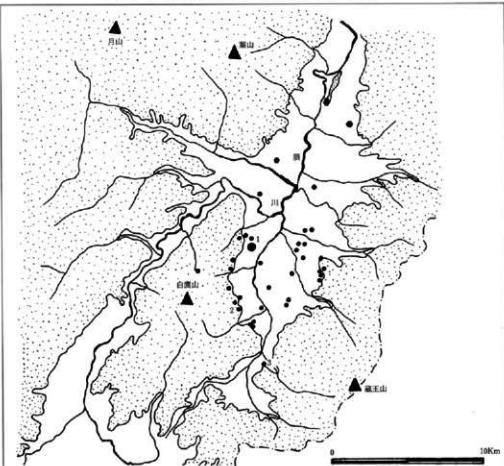
埴輪を樹立した古墳としては、今回が3例目、日本海側の北限になります。出土した埴輪は、まだ整理が進んでいないのではつきりしませんが、穿窓で焼かれたものと考えられます。円筒埴輪は、基本的に二次調整を省略した一次調整たてハケ系列の埴輪と言えます。現段階では、5世紀後半から6世紀初頭頃の時期を考えておきたいと思います。

今後の課題としては、東側の状況や墳丘を調べて、古墳の規模と墳形、埴輪の組成と配置状況、築造時期などをはつきりさせて、この古墳の歴史的評価をしていく必要があります。



▲28 復元埴輪

▼29 山形盆地の古墳分布と埴輪をもつ古墳



1. 大塚天神古墳
2. 菅沢古墳群
3. 土矢倉古墳群

---- 発刊にあたって ----

この報告書は、町の農村公園造成工事に先立つて行つた試掘調査により、新たに発見された大塚天神古墳の第1次調査の概要をまとめたものです。

考古学関係者からは、「大塚」という地名からしてどこかに古墳があるに違いないと言われてきました。しかし、地元の方々は、ところどころに小さな塚のようなものはあったが古墳があったという話は伝わっていないということでした。この大塚天満神社もこれまで「川ごめ天神」「川よけ天神」として、地元の人々の信仰を集めきていました。

今回の発見は、埴輪の出土する古墳としては県内でも3例目ということで、東北の古代史を考える上でも極めて重要な意義を持つものと思われます。

さらに、山辺町の歴史にも新たな史実が加わったということで関係者一同大変喜んでいます。

この度の調査は、農村公園事業と埋蔵文化財の調整を図るために、古墳の規模、範囲、埋まっている深さ等を確認したものです。古墳の全容を明らかにするには、今後の第2次調査に期待されます。

調査は、残暑の厳しい頃からの発掘で大変ご苦労も多かったと思います。調査主任の茨木光裕氏はじめ調査に携わった多くの関係者に心から感謝申し上げます。

また、調査に際しては、本年4月に急逝されました故工藤一夫氏に大変お世話になりました。心から冥福をお祈り申し上げます。

最後になりますが、この報告書が考古学関係者のみならず多くの方々の目に触れ、埋蔵文化財に対する一層の理解につながれば幸いに存じます。

山辺町教育委員会
教育長 蜂谷 四郎



▲30 整備された大塚天神古墳公園

---- 後記 ----

大塚天神古墳が今までの調査で、村山盆地の中でも埴輪の出土する古墳としては、山形市の中沢古墳と同規模の円墳でないかと言われており、考古学関係者から重要な遺跡として、大変注目されています。

町内には、今回発見された大塚天神古墳や坊主塚古墳群、さらに最近の分布調査で古墳ではないかと言われている要害塚、根際古墳と多くの古墳群があります。

この度の調査で、先人の残した貴重な歴史遺産の保護を図り、町民共有の財産として永く後世に伝えていくことの大切さを改めて実感しました。

また、これらの貴重な歴史遺産を地域の中で、「村おこし」や「町づくり」等の「地域資源」として、どのように活用していくかが今後の課題であると思います。

山辺町埋蔵文化財調査報告書第6集
大塚天神古墳第1次調査概要

1997年10月 発行

山辺町教育委員会

〒990-03
山形県東村山郡山辺町大字山辺1番地
0236-64-6033